

発行にあたって

本資料集は『法学新報』から中央大学関係記事を採録した第十七集以降のシリーズの一〇冊目に当たります。この第二十六集では、一九二四（大正十三）年度刊行の『法学新報』第三四巻第四号から第三五巻第三号までの一二冊から、中央大学関係記事五六件を抜粋・採録しました。

本学にとってのこの時期は、前年の関東大震災の打撃から立て直しをはかり、一九二六年に神田区南甲賀町に駿河台校舎を新築移転する前までの過渡期と言えます。

本資料集では、本学関係者のヨーロッパ留学に関わる記事が注目できます。本学の留学生の第一号は一八九九年十二月から一九〇三年八月までドイツに留学した渡辺豊治ですが、以後も自前の教員の育成・充実を目指し、卒業生や教員を主にヨーロッパへ派遣しました。本集には一九二三年に本学初の在外研究員となった天野徳也をはじめとして、卒業生の柴田甲四郎、升本重夫（喜兵衛）、中村武、片山金章、松浦要など、のちに本学の経営や研究面で重要な役割を果たすことになる人物が登場します。彼らは当時本学経営の中心にあつた佐藤正之理事にたびたび留学中のヨーロッパ各地から報告をしています。彼らの報告から、当時の留学先の事情や研鑽の様子、留学生や学員（本学卒業生および教員）相互の交流などを知ることができます。なかでも、外交官としてベルリンに赴任した本多熊太郎と須磨彌吉郎の両学員と天野・柴田・中村・升本たち留学生とが会合し、記念撮影を行ったことなど、大変興味深い記事があります。

留学から帰国した彼らは、早速本学の教壇に立ち、先進の学問を学生達に伝えていくこととなります。

関東大震災では本学の図書館とその蔵書は幸いにも罹災を免れましたが、一九一七年の失火で創立以来の蔵書は既に灰燼に帰しており、一層の充実を必要としていました。図書館報告などから、留学先での洋書購入や、菊池文庫の創設、関係者からの寄贈図書など、今日の図書館の充実に繋がる事柄を垣間見ることができるよう。

錦町時代の本学拡充の様子を物語る資料集です。

二〇一四年三月

中央大学史料委員会専門委員会主査

松 尾 正 人